２０２２年度

愛 知 の 生 活 科 教 育

（第２８集）

も　く　じ

授業実践

実践１　（一宮・木曽川西小・野村　寿子）……２

実践２　（刈谷・小垣江東小・佐藤　雅子）……８

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会生活科部会

２０２２年度　　教育課程研究委員

ブロック推薦者　　◎部長　○副部長

名　古　屋			尾　張			三　河		
氏　名	単　組	学校名	氏　名	単　組	学校名	氏　名	単　組	学校名
◎中新　良介	名古屋	大高小	○村瀬　真弓	一宮	末広小	○村上　泰子	幸　田	幸田小
吹原　健志	名古屋	旗屋小	山内　麻未	春日井	西尾小	松井　浩子	田　原	野田小

第 68 次～第 71 次教育研究全国集会リポート提出者

68 次			69 次			70 次			71 次		
氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名
栗山美保	岡崎	岡崎小	一柳聡志	名古屋	神宮寺小	―――	――	―――	近藤香奈子	春日井	岩成台小

第７２次教育研究全国集会リポート提出者…　池上　彩花（豊川・小坂井東小）

Ⅰ　はじめに

生活科教育の分科会では、栽培活動を通して、植物への思いや願いをもち、思考を深めた実践、身近な自然を生かした遊びやおもちゃづくり等、主体的に対象と関わる活動を通して、対象への愛着を深め、自信や自己肯定感の高まりをめざした実践など、15 本のリポートが提出された。以下、本次教育研究活動の概要をまとめた。

Ⅱ　第 72 次教育研究活動の概要

１　教育課程編成にあたっての基本的な考え方

○　「基礎・基本」について

子どもたちは具体的な活動や体験を通して対象や自分自身についての気付きを得ていくことが生活科の「基礎・基本」となる。「基礎・基本」を身につけるためには、子どもたちが繰り返し対象とかかわることができるような活動の時間や場所を保障することが大切である。また、仲間とのかかわりがもてる場を意図的に設ける必要がある。

○　「生きてはたらく力」について

子どもたちにとって「生きてはたらく力」となるためには、活動して終わりではなく、しっかりと振り返り、気付きを自覚させることが大切である。そのためには、自分の活動を記録に残したり、具体的な活動や体験を通して得た気付きが、活用できるような場面を設定したりする必要がある。

２　県内の自主的研究活動の取り組み状況

本次の研究活動においては、充実した実践研究活動がなされた。多くの学校で、目の前の子どもの姿をとらえるとともに、教育課程の編成に明確な方針をもち、その方針に沿って具体的な手だてを設定して授業づくりに取り組んでいる様子がうかがえた。

本次の特徴としては、子どもたち一人ひとりの思いや願いの実現にむけて、主体的に対象へかかわらせている実践が多くみられた。また、仲間や園児、地域の方等、さまざまな人とのかかわる場をもち、対話的な活動の充実を図る実践が多く見られた。生活科を通して子どもたちの自立の基礎が養われていく確かな実践が進められていることが感じられた。

本次の研究集会では、発表時間は５分、発表を学年別の配列とした。総括討論では、「他者とのかかわり方について」「コロナ禍でもできるかかわり方について」をテーマに話し合ったことで、充実した討論が行われた点が評価される。

Ⅲ　授業実践

実践１　　**新たな価値を創出し、生活の中に生かす子ども** **～1年「がっこう　だいすき」　人と関わりながら、** **「だいすき」が増える活動を目指して～**	**１年（　時間）**
単元　「がっこう　だいすき」	

１　実践のねらい

４月に小学校に入学したばかりの１年生の子どもたちは、学校でのさまざまな学習や活動を通して、日を追うごとにほとんどの児童が、毎日を元気に過ごせるようになった。しかし入学当初は、今まで過ごしてきた環境とは大きく異なる小学校という場所で、初めて出会う人・経験することも多く、何をするにも不安を隠せない様子であった。

そんな入学後間もない１年生の児童の実態を考慮し、今までに身につけてきた力を生かしながら、小学校生活をスムーズにスタートさせることができるように、生活科を中心に合科的・関連的な指導を行い、児童の思いや願いを生かした学習活動を構成することにした。

また、小学校入学前から在校生と交流したり、入学後も異学年との交流を積極的に進めたりすることで、身近な人から学び、その人とのかかわりを深め、そこから人とかかわることのよさや楽しさを実感することができると考えられる。

さらに、生活科を中心として、各教科や行事、学校生活と関連させた活動を多く取り入れ、児童のやりたいことや願いをくみ取って進めることで、楽しみながらさまざまな力が身につき「勉強は楽しい」「学校だいすき」という児童の大きな自信につながるのではないかと考えた。

そこで、めざす児童像を以下のようにたてた。

（１）人とのかかわりを大切にし、楽しく充実した学校生活を送ることができる児童 （２）自分の思いを大切にし、いきいきと活動したり、表現したりすることができる児童

研究の仮説

人とかかわることを大切にしたさまざまな活動を設定すれば、１年生の児童はいきいきと活動し、充実した小学校生活を送ることができるであろう。

２　活動計画

（１）　入学前から始まる異学年との交流の設定（経験の蓄積）
（２）　かかわりを大切にした学校たんけん（気付きの深まり）
（３）　人とのかかわりを生かした活動の設定（つながりの広がり）

３　活動の概要

（１）　入学前から始まる異学年との交流

①一日体験入学　＜２月・１年生との交流＞

本校では、毎年２月に新入児の一日体験入学を行っている。４月に入学を控えた新入児を学校に招き、実際に使用する教室の様子や学校の雰囲気を知ってもらうことで、入学への期待を高め入学後の学校生活の見通しを立てることができる機会となる。そこで、算数の学習で使用する算数セットの中のすごろくやおはじきを使って、１年生と新入児が一緒にすごろく遊びを行ったり色板を使ってさまざまな形をつくる活動を行ったりした。保護

者と離れることに不安があったり、慣れない教室で過ごすことに戸惑ったりする様子も見られたが、１年生から優しく声をかけてもらうことで、楽しそうに過ごすことができた。帰りには、１年生が育てたアサガオの種をプレゼントされ、「4 月にまた会おうね。」という約束をして別れた。新入児は、終始笑顔で過ごすことができ、迎えに来た保護者にうれしそうにプレゼントを見せていた。１年生とのかかわりをもつことで、入学をすることへの期待をもたせることができた。

②6 年生とのペア学年　＜４月・６年生との交流＞

本校では、「ペア学年」として、1 年生と 6 年生がペアになって活動する機会を設けている。毎日の清掃を 6 年生と一緒に行ったり、読書週間には、6 年生が選んだ本を読み聞かせてくれたりする。１年生は、６年生と過ごす時間をとても楽しみにしている。

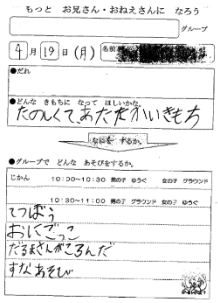
そこで、6 年生とのかかわりがより充実したものになるよう、入学後まもなくペアの顔合わせのための名刺交換を行った。名刺は国語科「どうぞ　よろしく」の学習で作成し、これからの２年生とのペア遠足の前など、人とかかわる活動をするたびに相手に渡すことにした。期待に胸を膨らませながらの対面では、優しそうな 6 年生の姿に、喜びの表情を見せる児童が多かった。あいさつを交わして交換した名刺を、児童は進級するまでずっと大事にしまっていた。校内でペアの児童に遭遇すると、お互いにうれしそうに手を振ったり声をかけ合ったりしていた。この後も、かかわる人ごとに名刺を渡すことで、学習を繰り返し行い、かかわりを広げることができた。

③1 年生を迎える会　＜４月・学校全体との交流＞

１年生が少しずつ学校生活に慣れ、他学年も進級し新しい学年・学級に慣れた頃、「1 年生を迎える会」が開かれた。ペアの 6 年生から手作りのペンダントのプレゼントをもらったり、一緒にクイズを考えたりした。クイズの問題は、学校や先生にかかわる問題が多く、まだ知らないことや驚く内容に「早くウサギを見てみたいな。」「この先生に会ってみたいな。」という気持ちが高まった。

④２年生とペア遠足　＜４月・２年生との交流＞

４月に行われた校外学習の前日に、2 年生とも名刺交換をした。２年生とは一緒に春の校外学習へ出かけ、その後の学校たんけんも一緒に回る。6 年生の時と同様に、丁寧に書いた名刺を交換し「明日は一緒に遊ぼうね。」と 2 年生から優しく声をかけられ、校外学習が、より一層楽しみになった。



【２年生の計画書】

【名刺交換の様子】

【校外学習の様子】

当日は、一緒に　　学校近くの緑地公園へ出かけ、外遊びを思い切り楽しんだ。１年生が楽しく遊べるようにと、

２年生が前日まで考えてくれた遊びに、児童はとても喜んでいた。学校とは違った場所で活動する楽しさを味わうことができた。また、２年生にとっても、年下の子と接することで進級した自覚を高め、小さい子に優しくすることの大切さを学ぶ機会となった。

＜考察＞

新入児は、入学前に、小学校の運動会への参加や就学時健康診断などで、何度か小学校を訪れている。しかし保育園・幼稚園の担任や保護者に引率されてくることが多く、在校生との交流はほとんどない。

そこで、一日体験入学で１年生と一緒に活動することで、新入児は教室での時間を楽しく過ごすことができた。保育園・幼稚園とは違う小学校や教室内の様子に、初めは緊張気味だったが、１年生が優しく声をかけ丁寧に教えることで、安心感をもつことができるようになった。入学前に小学校の生活を知り、在校生と交流することで、新入児はわくわくした気持ちになり、入学への期待を高めることができたと考えられる。

１年生は保育園・幼稚園では年長児として、さまざまな力をつけ行事等で在園児を引っぱってきた。そこで、今まで身につけてきた力をさらに高め、小学校でも生かせるようにするために、入学後、最高学年の６年生や、一日体験入学で交流した２年生との活動を多く取り入れ、交流する機会を多く設定した。そうすることで、１年生は在校生の姿からさまざまなことを教わり、学校のみんなから見守られているという安心感をもつことができた。そして「小学校は楽しい」という思いをもち、小学校生活をスムーズにスタートさせることができた。

（２）　かかわりを大切にした学校たんけん

①「がっこうの　なかを　みにいこう」　＜４月・クラスのみんなと一緒に＞

入学して間もない１年生は、多くの時間を教室で過ごす。教室の中だけでも、わくわくすることは多いが、教室から一歩出ると、まだまだ知らないことが多い。そこで、まずは担任引率で、校内を歩いて回った。学校たんけんのルールとして「①大きな声を出さない②廊下や階段は歩く③他の教室に出入りするときのあいさつ」を担任から繰り返し説明した。１年生にとっては、何を見るにも驚きと発見の連続で、ルールのことは忘れてつい大きな声を出してしまう児童も多くなってしまった。しかし、「お兄ちゃんの教室だ。」「見て、ペッパーくんがいるよ。」などの声が聞かれ、楽しい経験であったと感じられた。教室に戻ってからも児童の興奮は冷めず、すぐに「また学校たんけんに行きたい。」という声が多く上がった。

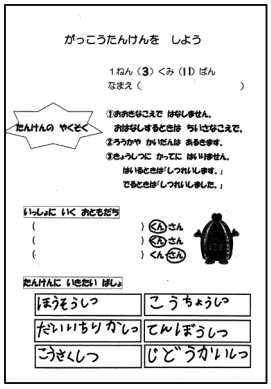
②「２ねんせいと　がっこうたんけんをしよう」　＜４月・２年生と一緒に＞

「もっとお兄さん・お姉さんになろう」という目標で活動している２年生が、校外学習に続き学校たんけんへ招待してくれた。１年生にどんな気持ちになってほしいか、どこに連れて行きたいかを事前にグループで考え、計画を立ててくれた。案内される１年生も、２年生がどこに連れて行ってくれるのか、わくわくしながらたんけんに出かけた。前回はクラスのみんなで学校たんけんをしたので、もっとゆっくり見たかった教室や、行けなかった場所も多かった。しかし、今回は２年生の案内なので、２年生が見せたいと思う場所は１年生にとっても魅力的な場所が多く、教室に戻ってきてからも「2 年生が、いっぱい連れて行ってくれたよ。」「一緒に行けてうれしかったよ。」など、次々に感想を述べていた。楽しい経験を積んだことで、児童の「もっと知りたい」という意欲も高まった。

③「ともだちと　がっこうたんけんをしよう」　＜５月・友達と一緒に＞

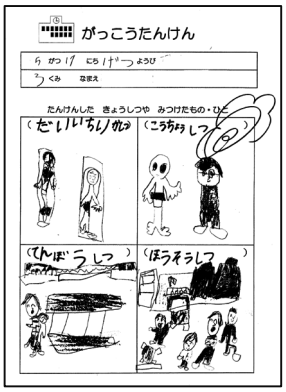
２回の学校たんけんで、児童の校内の施設に対する興味が高まった。そこで今度は１年生だけで学校たんけんを行うことにした。「1年生だけで行こう。」という教師の提案に、不安よりも喜びのほうが大きかった。校内の地図を見ながら、グループでそれぞれが行きたい場所を選び、どの順番で回るのがよいのかも考えた。たんけんの話し合いでは「どこに行きたい。」「こっちから回ったほうがいいよね。」などと、今までの学校たんけんを振り返りながら、友達の意見も聞き入れて計画を立てることができた。

グループで出かける学校たんけんに、児童は心を弾ませていた。「地図をよく見て行こう。」と、計画に沿って学校たんけんに出かけた。学校たんけん中も、2年生から教わったルールを思い出し、「走っちゃだめだよ。」「小さい声で話そう。」と友だちどうしで声をかけ合うことができた。学校たんけん後の振り返りでは、見てきたものをよく思い出しながら、印象に残ったものを絵や言葉でまとめた。部屋の中にあったものだけでなく、出会った先生や掲示物などをかく児童も見られた。



【たんけんの計画書】

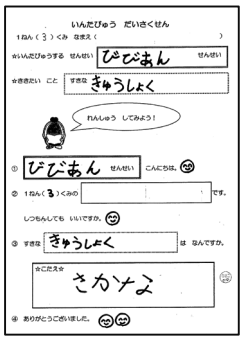
【学校たんけんの様子】



【学校たんけんのまとめ】

④「がっこうにいる　ひとと　なかよくなろう」　＜５月・先生のところへ＞

１年生の児童にとって、担任は１日のほとんどを一緒に過ごすので、とても身近な存在である。しかし、他の教職員と接する機会は少ない。３回の学校たんけんで、児童は学校にはいろいろな教室や施設があるだけでなく、多くの先生がいることにも気付いた。そこで、気になった先生ともっとなかよくなるために、先生インタビューを行うことにした。丁寧な話し方は、国語科「なんていおうかな」で担任や友達を相手に繰り返し練習した。インタビューでは、お目当ての先生を見つけるとうれしそうに駆けつけ、話を聞くことができた。インタビューの最後には自分の名刺を渡し、先生との交流を深めることができた。



【先生インタビューの様子】

⑤「がっこうで　みつけた　ことを　つたえよう」　＜５月・友達と一緒に＞

先生インタビューで聞いてきたことを友だちに伝えるために、「先生クイズ」をつくった。同じ先生にインタビューする児童も、質問が重ならないようにしたため、インタビューの内容は自分しか知らない先生の秘密である。児童はわくわくしながら問題づくりに取り組んだ。先生の似顔絵も描き友達の前で楽しそうにクイズを出題した。回答する児童も「その先生、知ってる。」「私も猫が好き。一緒だね。」と、いろいろな先生に興味を示し、児童の興味もますます広がった。

＜考察＞

「学級→２年生と一緒→少人数のグループ」というように、一緒に行く人の数を減らしながら繰り返し学校たんけんを行った。それにより、児童の「知りたい」「やってみたい」という意欲を持続させることができた。授業中であるので、他の学年に迷惑をかけないためのたんけんのルールもいくつか定めてあったが、３回目のグループでの学校たんけんでは、教師がそばにいなくても、自分たちでルールを意識して活動することができた。

また、初めはいろいろな教室を見るだけでもわくわくしていたのが、段階的に学校たんけんをすることで、徐々に「たくさんの楽器が置いてあった。」「高学年が使う部屋だ。」という、自分なりの発見をできるようになった。そして「けがをしてしまったら、保健室へ行くといい。」「校長室に行けば、校長先生に会える。」というように、気付きから自分とかかわらせて考える「生活科の見方」ができるようになり、気付きの質が高まった。

入学当初は誰かと一緒に、教えられながらの活動が中心であったのが、３回目の学校たんけんでは１年生だけで計画し、活動できるまでになった。教えられていただけの１年生が、さまざまな人とのかかわりを通して学び、主体的に活動できるようになったといえる。

（３）　人との関わりを生かした活動の設定

①見守り隊お礼の会　＜１０月・地域の方へ＞

児童は、学校生活を送る上で、いろいろな方にお世話になっている。道徳「ありがとうがいっぱい」では、自分たちの周囲には、支えてくれる人がたくさんいることに気付き、感謝の気持ちを伝えようとする意欲を高めた。その中でも、地域の見守りボランティアの存在をあげる児童が多かった。そこで、いつも見守ってくれていることに対して、感謝の気持ちを伝える会を１年生で行うことにした。「どんな会にしたいか。」と児童に問いかけたところ、「楽しい会にしたい。」「見守り隊をやっててよかったと思ってほしい。」という意見が出た。そこで、お礼の会ではお礼の言葉を述べたり、運動会で踊ったダンスを披露したりした。手をつないで校内を案内し、見守り隊の方を喜ばせることができた。周囲の人の支えがあるという児童の気付きが、活動の広がりへとつながった。

②一日体験入学　＜2 月・新入児と一緒に＞

生活科「もうすぐ　２ねんせい」で、自分たちも同じようにプレゼントされたことを思い出し、新入児を小学校へ招待することになった。「新入児に、どんな気持ちになってもらいたいか。」という教師の問いかけに対して、「学校は楽しいって思ってほしい。」「安心してほしい。」と、一年前の自分の姿を思い出しながら考えていた。新入児

を喜ばせたり、困っていたら助けたりしてあげたいという、相手のことを考えた言動が多く見られた。

新入児を教室に迎えてからも、優しく声をかけながら接することができた。新入児と目線を合わせて話しかけていた。今まで自分たちがしてもらって嬉しかったことを思い出し、それを今度は新入児に返そうとする姿が見られた。

【新入児を迎える飾り】

【アサガオの種を渡す様子】

【一緒に活動する様子】

＜考察＞

自分たちが学び、身につけるための活動が多かった１年生だが、いろいろな人とのかかわりの中で力をつけ、「誰かに教えてあげたい」「自分たちでできることをやってみたい」という思いをもつようになった。児童の感謝の気持ちや人を思いやる気持ちが高まったことにより、活動の対象も地域の方や新入児へと広がり、児童は主体的に活動できるようになった。

４　実践のまとめ

○目標とする姿がいつも身近にあることを意識させることで、今の自分の姿と比べながら、自分自身を高めていくことができた。

○体験入学で年長児と関わることで、自分のことだけでなく相手のことも考えられるようになった。

○自分の経験を思い返すことで、入学前の自分の姿を思い出し、自分の成長にも気付くことができた。

○さまざまな学習活動や学校行事、学校生活を結び付けて展開したことで、１年生の児童は入学後も安心してスムーズに小学校生活をスタートさせることができた。そして、学習したことや身につけたことを学校生活の中で生かすこともできるようになった。

○生活科を中心に、その他の活動をうまく関連させることで、１年生の児童は生き生きと活動し、学校生活を充実させることができた。

●児童一人一人の意欲や力に合わせた柔軟な活動の展開が必要である。

●学年だけでなく、学校全体で１年生を見守り、育てていくという共通理解をもたなければ、活動をうまく進めることはできない。

●安全確保のためのさまざまなルールを一通り覚えたからと言って、必ずしも安全な学校生活が送れるという保証はない。常に児童が何に関心をもち、どういった行動をとっているか把握し、十分に安全に配慮する必要がある。

実践２　思いや願いをつなげ、友だちとともに考え、学ぶ喜びを実感する子の育成　１年（23 時間）

１　主題設定の理由

現行の学習指導要領において、学習意欲を育む資質・能力は「学びにむかう力・人間性等」である。これは、単元が終わってもなお児童の興味・関心、学びたい意欲が続いていることを意味している。生活科において、児童の「～したい」「こうなるといいな」という思いや願いが続くような授業ができたら、どんなにすてきだろう。１学期に行った「なつのあそびだいすき！なつのにっこりランドへようこそ」の単元では、水を使った遊び屋さんを企画・運営し学区の幼稚園児を招く活動を行った。１年１組の児童（21 人）は、にっこりランド当日、小学校のお兄さん・お姉さんとして優しく園児に声をかけたり、自分のやりたい仕事を進んで行ったりする姿が見られた。児童の振り返りノートの記述からは「園児を喜ばせることができた」という達成感を見取ることができた。

本学級の児童のよさは、生活科の授業の中で遊びや学習対象にすぐに心を寄せ、活動に没頭できることである。一方で、次の時間へその思いや願いをつなげていくという姿までには至っていない。その時間、その場では遊びを楽しむことができるが、次の時間になると前時までの思考が途切れてしまうのである。また、グループで活動をしたり、全体で話し合ったりすることには積極的であるが、友だちと力を合わせて学ぶことのよさ、面白さを実感できずにいる。学習の中で、自分たちの活動に満足感を得ているものの、「楽しかった」「幼稚園の子が笑ってくれてよかった」などの対象に対する気付きにとどまっており、自分のがんばりや成長について実感している姿まで高めたいと考えた。友だちと力を合わせたり、話し合いをして意見を聴き合い、それを互いに取り入れたりすることのよさに気付き、協働で学ぶよさを実感することでもう一歩上の成長が望めるのではないか。

このような児童の実態と教員の願いから、本単元では児童がそれぞれ自分の思いや願いをもち、それをつなげていく工夫が必要であると考えた。自分の思いや願いをつなげ、友だちとともに考えて取り組んだ活動の中で「誰かの役に立った」「こんなに成長できたんだ。」という学ぶ喜びを味わうことができれば、新しい教育課程で育成を目指す学びに向かう力がますます発揮されていくだろうと考え、本主題「思いや願いをつなげ、友だちとともに考え、学ぶ喜びを実感する子の育成」を設定した。

２　めざす児童像

思いや願いをつなげ、友だちとともに考え、学ぶ喜びを実感する子

３　研究の仮説

(1) 児童の心の動きを重視し、思いや願いを継続できるよう夏から秋冬へと１年を通したストーリー性のある授業を展開したり、児童に学びの主体を預け、意識の流れに沿って柔軟に単元を構想したりすれば、児童の思いや願いはつなげられるだろう。

(2) 活動や話し合いの場において友だちと認め合ったり考えを聴き合ったりするような授業展開を工夫すれば、友だちとともに考え協働的に学ぶよさを実感することができるだろう。

(3) 自分の学びや友だちの考えについて振り返る工夫をし、学んだことを活用する場を設定すれば、思いや願いの実現を自覚化し、「人の役に立てた」「自分が成長した」という学ぶ喜びを実感できるだろう。

４　研究の手だて

(1) 仮説１に対して

① 本単元を夏の学びからつながっているような感覚がもてるようにしくみ、児童に活動の内容と次時へのつながりを理解しやすくさせることで、見通しをもちながら活動できるようにするとともに、冬の単元とつなげることで、年間を通して児童の思いや願いを持続させるようにする。

② 児童の活動の様子や振り返りノートの記述から意識の流れをていねいに見取り、必要に応じて単元の流れを前後させたり、加除修正をしたりすることで児童自らが学びの主役であることを実感させる。

(2) 仮説２に対して

活動をした直後にその場で思ったことや感じたことを交流できるような時間と場を設定し、児童がそれらをすぐに表出できるようにするとともに、その時の発言や振り返りノートから児童の思いや願いを見取って教員が理解し、それをもとに学級全体での話し合いのテーマを設定したり、意図的に他の児童にその思いや願いを広げたりする。

(3) 仮説３に対して

① 幼稚園児を招待し、自己のとりくみの有用性に気付けるような活動を設定することで、夏の単元と比べて成長した点に目を向けさせたり、構造的な板書を工夫したりして思いや願いの実現を自覚化させ、自分の成長についても実感できるようにする。

② １月末に行われる入学説明会にむけて、これまで学んできた経験や自分の成長を生かして話し合う中で、自分の考えと友だちの考えを往還させながら聴き合い、よりよい考えに練りあげたり、新たな考えを引き出したりすることで、ともに学ぶ喜びを実感させる。

５　単元構想（23 時間完了）

秋について知っていることを共有することで「秋」という季節に興味をもち、小垣江三山でたくさん遊びたいという意欲につなげる。①

どんぐりが落ちているよ。

夏休みの前に緑色だった小垣江三山の葉は、何色になっているかな？

小垣江三山で秋を見つけたり、遊んだりしたい。

小垣江三山に何度も出かけ、その自然の中でできる遊びを見つけさせ、充分に遊ぶ時間を設ける。②～⑤

三山で鬼ごっこをすると楽しいよ。お気に入りの遊びだ

拾ったドングリや葉っぱを入れる宝箱を作りたいな。

小垣江三山で見つけたお気に入りの遊びを紹介させ、遊びを友だちと共有する時間を設ける。 好きな遊びで友だちととことん遊ばせる時間を設ける。⑥～⑨

グーチョキパーの形の葉っぱを見つけたよ！葉っぱじゃんけんをしようよ！

くっつきむしで形をつくって遊んだよ。

幼稚園の教員から手紙が届くことで、「秋の三山〇〇ランドをつくって、今度は幼稚園の子たちに小垣江三山の秋の楽しさを伝えたい」という思いをもたせる。⑩

なつのにっこりランドがんばってよかったな。秋もぜひ、小学校にきてほしい！

ぼくたちも去年遊んでもらったよね。

みんなで名前を考えよう！

１学期は「にっこり」が大成功だったから、「わくわく」はどうかな？

あきの三山わくわくしぜんランドをつくって、幼稚園の子たちに、三山の秋の楽しさを伝えよう。

２クラスを解体し、どんな遊びをしたいか話し合う時間を設け、グループに分かれて準備を進めさせることで、一人一人の思いや願いを実現しやすくさせる。⑪～⑯

すべりだい　たからさがし　ドングリレース　キャンプ　ドングリキャッチ

幼稚園の子が楽しめるように遊び方を工夫したり、困りごとを話し合ったりしたいな。

グループ活動の振り返りノートから、他のグループと共通の話題になりそうな「みんなで話したくなる話題」を見つけて、全体で話し合う場面を設定する。⑰⑱

幼稚園の子に配るスタンプカードは必要かな？

グループで「協力する」ってどんなことだろう？

ドングリキャッチで、ドングリをつかまえるのが難しいよ。どうしよう？

すべりだいが全然すべらないよ･･･。

幼稚園の子を招待して、あきの三山わくわくしぜんランドで一緒に遊ぼう。⑲⑳

なつのにっこりランドの時の自分とあきの三山わくわくしぜんランドを終えた自分を比べて振り返らせることで、自分の成長を実感させたり、また園児を喜ばせたいという意欲を高めさせたりする。㉑㉒

にっこりランドの時より説明するのが上手になったよ。

友だちとけんかをしても、すぐに仲直りできるようになったよ。

先生がいなくても、自分たちの力でできるようになったよ。

もっと幼稚園の子と遊びたいけど、また来てくれるかな。

写真や生活科ファイルのワークシートなどを使ってこれまでの生活科の活動を振り返らせ、入学時から成長した自分に気づかせる。
これまでの経験をもとに ３学期の一日入学で新１年生にしてあげたいことを考えさせる。㉓

なつかしい！生活の時間にこんなことをしてきたんだね。

幼稚園の子を喜ばせてあげられたし、役に立ててうれしいな。

１日入学で新１年生の子と会えるのだね。もちろんぼくたちに任せて。

小学校のことを、教えてあげたいな。

みんなと話すと、新しい考えが出てきて楽しいな。
新１年生の子が入学するのが楽しみになるような会になるといいね。
次の生活の時間が楽しみだな。早く一日入学本番にならないかな。

６　授業の実際と考察

(1) 幼稚園の教員とともに学びをつくる

本単元は、一年を通し幼小の連携を図り、ともに学びをつくることを意識して構想したものである。本単元において児童の心を動かす大きなポイントとなるであろう「幼稚園の先生からの手紙」の内容については、単元開始前に学区の幼稚園を訪ねてこちらの意図が伝わるようにていねいに思いを伝えた。児童に、夏の学びとこれからの秋の学びがつながっているような感覚をもたせるために、年長児の担任の教員には、１学期に行った「なつのにっこりランド」での児童のよさを具体的にほめていただき、「そんなかっこいい１年生のみんなであるから、もう一度園児と遊んで欲しいという気持ちになった」ことを手紙に書いてもらった。また、小垣江三山（さんざん）（本校の校庭にある、くらし山・ドングリ山・フルーツ山・新山を合わせた愛称）を学習対象としながら活動していくために、「幼稚園にはない、三山というすてきな場所で遊んで欲しい」という内容を加えてもらった。

(2) 大好きな三山で思い切り遊ぶ児童

単元の導入で「秋ってどんな季節だろう？」と問うと、児童はこれまでの体験をいきいきと語り始めた。ある児童の「三山にもドングリがたくさん落ちてるよ。栗もあるよ。」という発言をきっかけに、学級全体の学びの対象は、児童にとっての身近な自然対象である三山に向かっていった。そこで、教室を飛び出して、三山にある秋を探しに行くことになった。本校の校庭にある小垣江三山は、児童にとって特別な場所であり、休み時間になると木の実を食べ物に見立てたままごとをしたり、木々の間を駆け抜けながら鬼ごっこをしたりしている。授業終了のチャイムが鳴っても、児童から「もっと遊びたい。」という声があがり、「次の生活の時間も、三山で思い切り遊ぼう！」と告げると大歓声があがった。

(3) 「なつのにっこりランド」の学びを生かす児童

第６時、これまで三山でたっぷり遊んだ児童に幼稚園の教員に書いていただいた手紙を読んだ。手紙を読み終えると、「もちろんいいよ！」「ＯＫ！」という声がつぎつぎと聞こえ、児童の笑顔があふれた。「そうかと思った。」という発言もあったことから、児童はすでに「遊び→幼稚園の教員からの手紙での依頼→〇〇ランドの企画・運営」という１学期の単元の流れに、本単元を重ね合わせながら新たな学びをイメージしていることがわかる。

第８時からは、三山の近くに黒板を持って行き、児童の活動の様子を見取りながら、必要と感じたらすぐに話し合いや振り返りをしたり、教員が意図をもってある活動を広めたりすることができる場を整えた。第８・９時と「幼稚園の子に三山の秋の面白さが伝わる」ように遊びの工夫を続けていくと、しだいに同じ遊びを繰り返し楽しむ小グループができていった。

Ａは、第９時の振り返りノートに「ドングリキャッチ」という遊びで楽しんだ様子を書き表した。振り返りノートの「つぎは･･･」の欄に「もっとたのしくあそんでもらえるようにしたいです。」と記述していることから、手紙の内容を受けて幼稚園児の気持ちに寄り添い、楽しんでもらうために遊びを工夫しようとしていることがわかる。

第10時には「秋の三山〇〇ランド」の名前を決める話し合いを行った。授業の準備をしていると、Ｂが近寄ってきて「先生、次は秋の三山ランドだね。」と話しかけてきた。続けて、Ｃが「秋のさんざん遊んだ三山ランドだね。」と話の輪の中に入ってきた。本時で名前を決めるということは児童に知らせていなかったため、二人の児童が次の活動を見通した発言をしたことに驚くとともに、夏の

学びでの経験や充実感が児童の中で生きており、活動の見通しをもちながら活動をしていると感じた。

「第１回三山会議」では、教員から「本番が成功するってどうなることだろう？」と児童に投げかけた。すると、「幼稚園の子がにっこりしてくれること。」「本番の次も会いたい。また小学校の探検をしたい。と言ってくれること。」などの意見が出た。それらを板書した後、「じゃあ、今回は〇〇ランドの〇〇にどんな言葉を入れようか？」と聞くと児童は活発に意見交換を行った。「なつのにっこりランド」の名前決めの時には思いついた言葉を好きに発言していた児童が、「〇〇に入る言葉＝自分たちの思いや願い」という意識をもって自分の考えを表出することができた。１学期のランドの名前をもとに今回の案を考えたり、友だちどうしの意見を重ね合わせて新たな言葉を生み出したりする児童の様子から、児童は夏の経験を生かすことで活動の見通しがもちやすくなったと感じた。また、学びの主体を児童に預けることで、それぞれの思いや願いを表出することができ、友だちとともに思いや願いをつなげることができると確信がもてた瞬間でもある。

(4) 友だちと力を合わせて活動するＡ

第 11 時には、「第２回 秋の三山わくわく自然ランド会議」を行い、今までの三山での遊びを振り返り、幼稚園の子と一緒に遊びたいことを考えた。「幼稚園の子に三山のわくわくと自然を伝えてあげるために」というキーワードをもとに友だちと考えを聴き合い「なぞとき、ドングリレース、たからさがし、すべりだい、ドングリキャッチ、キャンプ」という六つの遊びが決まった。夏のランドでは、教員が遊びごとに人数を指定してしまい、希望の遊びチームになれなかった児童がいたが、本実践においては人数の偏りがあっても全員が第一希望の遊びに入れるようにして、児童の思いや願いを切らすことのないようにチーム編成を行った。

第 12 時からは、チームごとに本番にむけて準備を進めた。その際には、児童の思いや願いがより詳細に見取れるように振り返りノートの項目を工夫し、1 年生の児童が直感的に活動を評価できるようにドングリに〇をつける欄や、友だちとかかわりながら活動できるように友だちについてだけ振り返る欄を作ったりして、互いのよさを見つけ合いながら活動ができるように支援した。

Ａの振り返りノートを見ると、第 12、13 時の活動に対して、ドングリの数を５（最高）と評価していた。その記述からは、友だちのよさを認めながら活動している様子を見取ることができた。また、「次は、もっと『幼稚園の子が楽しい』と言ってくれるようにしたいです。」という記述からは、次時の学びの展開にむけて思いや願いがつながっていることがわかる。

教員は、振り返りノートにすべて朱書きをし、次時へつながるような助言をしたり、今だれがどのような考えをもっているのかを見取ったりしながら授業の構想を練っていった。すると、Ａのように、友だちのよさについて記述している児童が増えてきていることが分かった。そこで、授業の導入に前時の肯定的な振り返りをチームの友だちと交流する時間を設け、互いのよさを伝え合いながら進めていくように授業を構想し直し実践したところ、児童が楽しそうに活動する姿や、チームの友だちに真剣に自分の考えを伝えようとする姿に発展していった。

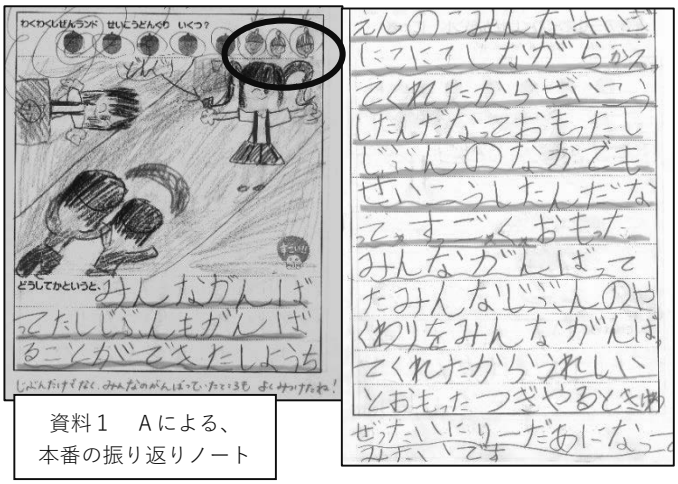
(5) 児童の様子や振り返りから 意見の聴き合いのテーマを決める

チームでの活動が進むにつれ、いくつか全体で確認しておくべき事柄が見えてきた。児童の振り返りノートをていねいに見取りながら、さらに児童の思いや願いを引き出すような聴き合いの場を設定した。ここで留意したことは、こちらの気付かせたい内容について記述している児童の振り返りを提示し、それをきっかけに考えさせるような活動を仕組んだことである。すると、児童は活発に自分の思いや考えを語り始めた。そして、「スタンプカードはどうするのか」「お土産は作るべきか」などの共通の問いに対して何人もの意見が重なりよりよい案に練りあがっていった。「なるほど、それならいいね」という納得するようなつぶやきが聞かれたことから、児童はみんなで学ぶよさにも気付くことができたと感じた。

(6) 「秋の三山わくわくしぜんランド」大成功！

自然ランド本番が始まると、児童は小学校のお兄さん・お姉さんとして、園児の顔を覗き込みながらゆっくりと話したり、笑顔で手を引いて案内したりしていた。自分の話している内容が分かっているかどうかをもう一度園児に尋ねたり、遊びを待つ時間に園児が退屈しないように砂に絵を描かせて一緒に遊んだりするチームもあり、臨機応変に対応している姿に大きな成長を感じた。Ａの本番の振り返り（資料１）には、成功ドングリが三つ追加されているとともに「みんながんばって（い）たし、

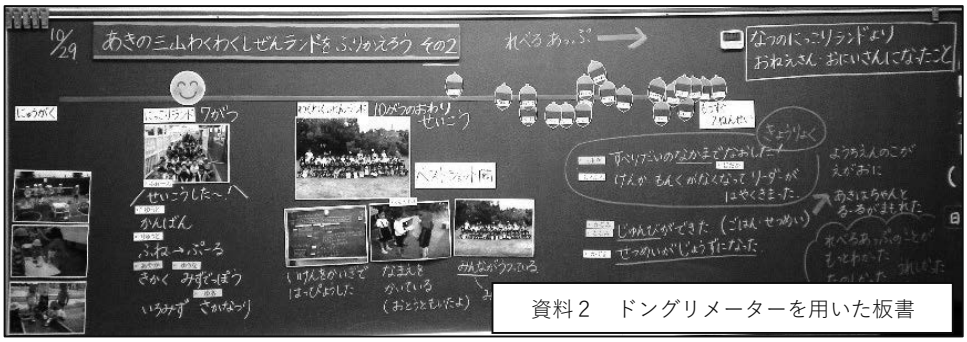
自分もがんばることができたし幼稚園の子みんな最後にこにこしながら帰ってくれたから成功したんだなって思ったし、自分の中でも成功したんだなってすっごく思った。」「みんな自分の役割をみんながんばってくれたから嬉しいと思った。」と記述していた。７月に行った「なつのにっこりランド」本番の振り返りでは、「全部楽しかったし、全部思い通りにできたから嬉しかった。」と自分の活動に対しての満足感だけを表現していたＡであったが、今回の振り返りでは「みんな」という言葉を多用しており、友だちのがんばりについても認め、ともに成功させられた喜びを感じることができていることがわかる。さらに、Ａは「なつのにっこりランド」に続き、秋にも始めの会の司会（立候補）を担当した。夏には、教員に与えられた原稿を暗記して話すことが精一杯だったにもかかわらず、今回は夏の司会の台詞をもとにして、同じ役割の友だちとともに休み時間に台詞を考える姿も見られた。夏の学びを生かしながら、自分の役割に責任をもってよりよいものにしようととりくむＡの姿は、こちらの設定した単元目標を超えていくものであった。



資料１　Ａによる、本番の振り返りノート

(7) 振り返りで自分の成長を実感する児童

第 22 時には、今回の本番を振り返りながら、「なつのにっこりランド」の時と今の自分を比べて、お兄さん・お姉さんになったところについて聴き合った。その際、自分の成長を自覚化させやすくする支援として「ドングリメーター」を考案し、入学から１年生の終わりまでを一本の線で表し、今の自分はどのあたりにいるのかを考えさせ、その場所に自分の成長度合いを示すミニドングリを貼らせた。そして、むかって右に行くほど時間が経過していくことが児童に伝わりやすいように、構造的な板書を心がけた。（資料２）本時の振り返りには「（みんなと授業をしてみて）協力のこと（よさ）が、もっとわかった。」「レベルアップしてうれしかった。」などの記述が見られたことから、自分のよさやがんばりについて目を向けさせるように教員支援を工夫したことで、児童は自分の成長を自覚化し、喜びを感じていることがわかる。



資料２　ドングリメーターを用いた板書

(8) 「あっちもいいな、こっちもいいな」楽しく聴き合う児童

本単元の最終時である第 23 時には、しぜんランドの終わりの会で幼稚園の教員からいただいた言葉を再び伝え、児童のこれまでの活動が「誰かの役に立った」「誰かを喜ばせることが出来た」ということを実感させることをねらった。そうして児童の思いが高まったところで、「実はみんなにお知らせがあって･･･」と４月から３回目となる同じ台詞を話し始めると、児童の目は輝きを増し、「もしかして！！」「また来るの？」と大歓声があがった。１、２回目は幼稚園の教員からであったが、３回目は本校の校長に手紙を直筆いただき「冬にある体験入学で、新１年生の子と遊んであげてほしい。夏と秋、２回成功させられたみんななら何かいいアイディアが浮かぶはず。ぜひ話し合って欲しい。」という内容を読んで伝えた。「体験入学で新１年生にしてあげたいこと」についての意見の聴き合いでは「新１年生の子は学校のことを知らないから、授業を一緒にやりたい」という児童の発言をきっかけに、その具体的な内容についてつぎつぎに発言やつぶやきが続き、多くの児童が思いや願いを語った。

本時の振り返りでＡは「みんなの意見を聴いたら、あっちもいいなこっちもいいなって、どれをやってあげたら（新１年生が）喜んでくれるのか授業で決められなかったです。」と発言し、Ａのこの言葉で本単元に区切りをつけることとなった。この記述からは、Ａが友だちとともに考え、学ぶ喜びを

実感していることがわかる。さらに、「授業で決められない」という部分からは、終わりのない授業展開であることがわかり、Aにとって、単元が終わっても思いや願いが途切れず、学びが続いていると言える。本時の振り返りノートには「（１月の本番は）楽しいなーって言ってもらいたい。」という記述があり、３学期の学びにむかってAの新たな思いや願いが芽生えてきていることがわかる。

7　研究の成果

(1) 仮説１について

児童の心の動きを重視して、思いや願いを継続できるよう夏から秋、冬へと一年を通したストーリー性のある授業を展開したり、児童に学びの主体を預け、意識の流れに沿って柔軟に単元を構想したりしたことで、児童の思いや願いはつなげられた。手だて①にしたがい、夏から秋、冬へと学びがつながっているような感覚をもたせたことで、Aをはじめ多くの児童が単元の早い段階で夏の学びを生かしながら新しい学びをイメージし、次の活動へと思いや願いをつなげながら活動することができた。その過程で、手だて②にしたがって児童の学びの姿を教員がていねいに見取り続け、それを受けた授業計画の変更や加除修正を加えたことで、児童の思いや願いを切らすことなく、児童自らが学びの主役であることを実感させることができた。

(2) 仮説２について

活動や話し合いの場において友だちと認め合ったり考えを聴き合ったりするような授業展開を工夫したことで、児童は友だちとともに考えながら協働的に学ぶよさを実感することができた。手だて①にしたがい、活動をした直後に交流させる場を繰り返し設定したことで、児童は友だちに対して思ったことや感じたことをすぐに表出することができ、相手にもしっかりと思いが伝わった。また、児童の振り返りノートをていねいに見取りながら、それを用いて意見の聴き合いの場やチームでの活動のさせ方を工夫したことで、児童は、思いや願いを友だちと集結して、実現させようとすることのよさを感じることができた。

(3) 仮説３について

自分の学びや友だちの考えについて振り返らせる工夫をし、学んだことを活用する場を設定したところ、児童は思いや願いの実現を自覚化し「人の役に立てた」「自分が成長した」という学ぶ喜びを実感できた。手だて①にしたがい、児童とともに「秋の三山わくわくしぜんランド」を計画したところ、児童は、夏と秋の学びを生かして幼稚園児との交流を成功させることができた。Aは、この活動を通して、自分のがんばりだけではなく「みんな」のがんばりについて喜びを感じることができた。また、振り返りでは、構造的な板書を用いて児童の成長した点に目を向けさせるように工夫したことで、児童は、夏の頃よりも成長した自分について気付き、喜びを感じることができた。さらに、手だて②にしたがい、学級の友だちと意見を聴き合う中で、児童は友だちの考えと自分の考えを往還させながら聴き合い、互いのよさを認める温かい雰囲気の中で新たな考えを練りあげようとすることができた。Aの振り返りから、友だちとともに学ぶ喜びとともに、本単元が終わりのない授業であることがわかり、単元が終わっても思いや願いが途切れず学びが続いていると言える。

8　今後の課題

本単元では児童の実態をていねいに見取り、それをもとに次の活動を計画したり加除修正をしたりしていった。その中でとても児童理解に役立ったのが振り返りノートの記述であった。しかし、文字量の少ない児童に対してどういった方法をとるべきか考えが至らず、正確にその児童の思いや願いを見取ることができていたか不安が残った。今後は、思いや願いを文字化して表現することが苦手な児童の見取りをどのような方法で行っていくのが最善なのか、ワークシートの工夫や声かけの仕方などを中心に、さらに研究を続けていきたい。

加えて、本実践の後に急速に広がった新型コロナ感染症により、これまでのように制限なく園児との交流をすることが難しくなった。年長児にとって、小学校という場所に何度も訪れたり１年生と複数回共に時間を過ごしたりすることは、小学校という環境に慣れるために非常に重要なことである。１年生と直接接触することは難しくても、手紙や動画をやりとりしたり、行事を参観し合ったりする等の工夫を重ねながら今後も幼保小連携・接続を推し進めていきたい。

Ⅳ　おわりに

1　研究のまとめ

⑴　生活科という教科の特性にかかわって

○　感染症拡大防止策をしながら、従来の学習活動を行うことが困難ななか、多様な手だてを講じ、少しでも子どもたちが、さまざまな物や人、対象と繰り返しかかわることができるよう環境を整えることが重要である。具体的な活動や体験を通すことで、よりいっそう気付きの質を高めていくことができると考える。

○　タブレット端末を活用した実践が多く見られるようになった。コロナ禍において、タブレット端末を効果的に活用することで、教育効果の高まりが期待される。しかしながら、タブレット端末に頼りすぎることなく、実物と触れ合うことのよさ、カメラ機能で観察を済ませるのではなく、たとえ上手に描けなくとも、対象を見て子どもが感じたままに描いた観察画から教員が子どもの気付きを引き出してしくことのよさについて理解した上で、タブレット端末の活用場面を考え、効果的に活用していくことが重要である。

○　子どもの姿を見取るための一手段として教員と子どもとの対話を繰り返し、思考を深めたり、気付きの質を高めたりすることが大切である。対話は直接会話をするだけではなく、朱書きによる対話も有効である。子どもの姿を見取ることは、子ども一人ひとりを評価していく上でも重要である。

⑵　生活科における子どもの学びについて

○　それぞれの単元の学習の中で、子どもが対象（人・こと・もの）とかかわり、対象への気付きを得ていく。さらに、その対象への気付きを通して、自分のよさや友だちのよさなどに気付くことができる。このような「成長した自分」に気付くことができるようにするために、学習活動の振り返りを行うことが、とても重要である。振り返りの方法は、学習活動や子どもの実態に合わせて工夫する。こうして自分自身の成長への気付きを積み重ねることで、子どもたちは自分に自信をもち、自立への基礎を身につけていくことができると考える。

2　来年度にむけての課題

○　学校や地域の特色を生かした教材の発掘。

○　幼保小連携と生活科を核としたスタートカリキュラムのあり方。

○　具体的な体験活動における効果的なタブレットの活用方法。

○　子どもの思考を深める効果的な交流活動のあり方。

○　カリキュラムマネジメントを意識した実践のあり方。

○　新学習指導要領において求められる子どもの力と評価。